

海外食料需給レポート

(2020 年 6 月)

令和 2 年 6 月 30 日

農林水産省

海外食料需給レポートについて

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(米、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

このレポートは、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

5 本レポートに記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

- ・食料需給表：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>
- ・食品の価格動向：<http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>
- ・米に関するマンスリーレポート：<http://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

- ・食料需給見通し(農林水産政策研究所)：<http://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報 (ALIC の情報サイト)：<https://www.alic.go.jp/>

- ・砂糖、でんぷん：<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>
- ・野菜：<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>
- ・畜産物：<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関 (英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関 (FAO)：<http://www.fao.org/home/jp/>
- ・国際穀物理事会 (IGC)：<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構 (OECD) (農業分野)：<http://www.oecd.org/agriculture/>
- ・農業市場情報システム (AMIS)：<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省 (USDA)：<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社 (CONAB)：<https://www.conab.gov.br/>
- ・カナダ農務農産食品省 (AAFC)：<http://www.agr.gc.ca/eng/home/?id=1395690825741>
- ・豪州農業資源経済科学局 (ABARES)：<http://www.agriculture.gov.au/abares>

目 次

概要編

I	2020 年 6 月の主な動き・・・・・・・・・・・・・・・・	1
II	2020 年 6 月の穀物等の国際価格の動向・・・・・・・・	2
III	2020/21 年度の穀物需給（予測）のポイント・・・・・・・・	2
IV	2020/21 年度の油糧種子需給（予測）のポイント・・・・・・・・	2
V	今月の注目情報 新型コロナの感染拡大による穀物輸出規制の動向と我が国の輸入への影響・・・・・・・・	3

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向・・・・・・・・	6
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移・・・・・・・・	7
3	令和元年 12 月以降の食品小売価格の動向 ・・・・・・・・	8

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦・・・・・・・・	1
2	とうもろこし・・・・・・・・	8
3	米・・・・・・・・	1 2
II	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・	1 6

【利用上の注意】

(概要編)

I 2020 年 6 月の主な動き

1 米国のとうもろこし、大豆の生育状況

米国農務省（USDA）の農産物需給報告（WASDE）等によれば、2020/21 年度の米国のとうもろこしの生産量は作付面積の増加から 4 億トンを超え、大豆も 1 億トン台に回復するとみられている。とうもろこし、大豆の生育は、降雨過多により大幅に遅延した前年度と比較して概ね天候に恵まれ、6 月 21 日時点でとうもろこしは発芽が終了し、シルキング率は 2 %となっている。大豆は開花期に入り、開花進捗率は 5 %と前年度の 1 %を上回り、過去 5 年平均と同水準となっている。

写真 受粉期前のとうもろこしへの肥料散布
(米国ネブラスカ州 6 月 12 日撮影)



7 月以降、とうもろこしは作柄の決定に大きな影響を与える受粉期を迎えることから、産地の天候の状況には、引き続き注視していく必要がある。

2 豪州の小麦の生産・輸出見通し

2 年連続の干ばつの影響を受け、小麦を始めとする穀物等の生産量が大幅に減少した豪州では、4 月から 5 月にかけて降雨があり、小麦を初めとする冬作物の作付けが開始された。豪州西部の一部等では、生育に必要な土壌水分量を確保するため更なる降雨が待たれている。

なお、豪州農業資源経済科学局（ABARES）の 6 月レポートによれば、2020/21 年度の小麦生産量は 2,670 万トンで、干ばつ被害があった前年度と比較して 76%増となる見通し。また、輸出についても 1,650 万トンと前年度より倍増するとみられている。

3 旧ソ連諸国の輸出規制動向

ロシアは、4 月に小麦、とうもろこしを始めとする穀物の 4－6 月期の輸出枠 7 百万トンを設定し、4 月下旬に輸出枠が満了となった。また、ウクライナは 2019/20 年度（7－6 月）の輸出上限数量 2,020 万トンを設定した。カザフスタンも 4 月、5 月と小麦及び小麦粉の輸出枠を設定した。

しかしながら、6 月に入り、カザフスタンは、小麦及び小麦粉の輸出枠の設定を取りやめ、規制を解除した。ロシアは、報道によれば、7 月以降、2020/21 年度の新穀の収穫が開始されることから、当面輸出規制は行わない見込み。今後、旧ソ連諸国の穀物等の輸出規制は解除に向けた方向に進むとみられる。なお、ウクライナの小麦輸出量は 5 月末で上限の 2,020 万トンに達したとみられる。

II 2020年6月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、5月下旬、190ドル/トン台前半で推移。カナダや米国北部での春小麦の作付け遅れも、米国産冬小麦の収穫の開始から180ドル/トン台後半で推移したが、米国農務省需給報告での世界の潤沢な供給や米国産冬小麦の収穫の進展から下落し、6月下旬現在、170ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、5月下旬、120ドル/トン台半ばで推移。米国の順調な作付進捗や新型コロナウイルス感染拡大に伴う需要の落ち込み懸念の一方、原油価格の復調によるエタノール生産量の回復が下支えし、ほぼ横ばいで推移し、6月下旬現在、130ドル/トン前後で推移。

米は、5月下旬、510ドル/トン台後半で推移。タイの降雨不足による乾季米の減産や雨季米への影響懸念もあり、依然として高止まりしており、6月下旬現在、540ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、5月下旬、310ドル/トン前後で推移。米国の順調な作付進捗等の一方、中国による米国産大豆の買付期待や原油価格の復調に下支えされ、やや上昇し、6月下旬現在、320ドル/トン前後で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場、米はタイ国家貿易委員会価格

III 2020/21年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前月から820万トン上方修正され27.6億トン。消費量は、前年度より290万トン上方修正され27.1億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

また、期末在庫率は前年度を上回り32.2%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前月と比較して、小麦、とうもろこし、米で上方修正されたことから、穀物全体で上方修正され27.6億トンの見込み。

消費量は、前月と比較して、とうもろこしで上方修正も、小麦と米で下方修正されたことから、穀物全体で上方修正され27.1億トンの見込み。

貿易量は、米で下方修正も、小麦、とうもろこしで上方修正され、4.5億トンの見込み。

期末在庫量は、8.7億トンと前月より上方修正され、期末在庫率も前年度を上回る。

(注：数値は6月の米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2020/21年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.1億トン。消費量は前年度を上回り6.0億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

なお、期末在庫率は前年度を下回り、18.5%となる見込み。

(注：数値は6月の米国農務省「Oilseeds : World Markets and Trade」による)

V 今月の注目情報:新型コロナの感染拡大による穀物輸出規制の動向と我が国の輸入への影響

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大に伴い、3月末から4月上旬にかけて東南アジア諸国や旧ソ連諸国で米や小麦等の輸出枠の設定などの輸出規制が行われたが、5月～6月にかけて解除される動きが見られる。

一方、最初に新型コロナウイルスの感染が発生した中国では、4月以降、感染者数が減少し、ASFにより減少した豚肉生産も回復に向かっているため、穀物の需要や輸入が回復する動きも見られる。最近の動向と我が国への影響をまとめた。

1 輸出国における穀物輸出規制の動向

(1) 小麦・とうもろこし・大豆

主要輸出国では、ロシアが小麦やとうもろこしの輸出枠を4～6月期に設定したが、7月以降は新穀の冬小麦の収穫が開始され、報道によれば、2020/21年度については当面、輸出規制は行われない見込み。

また、カザフスタンの輸出規制は6月1日以降解除された。さらに、ロシアやカザフスタンが加盟しているユーラシア経済同盟において輸出規制が行われていた穀物や油糧種子のうち、中国向け輸出の需要が見込まれる大豆については6月13日に解除された。

なお、ウクライナは2019/20年度(7月～6月)の小麦について政府と業界の合意に基づき、2,020万トンの輸出枠(上限数量)を設定しており、6月上旬には上限数量に達した。

ブラジルでは、大豆の収穫は既に終了し、冬とうもろこしの収穫が開始されたが、順調に輸出が行われており、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う穀物等の輸出規制は行われていない。

(2) 米

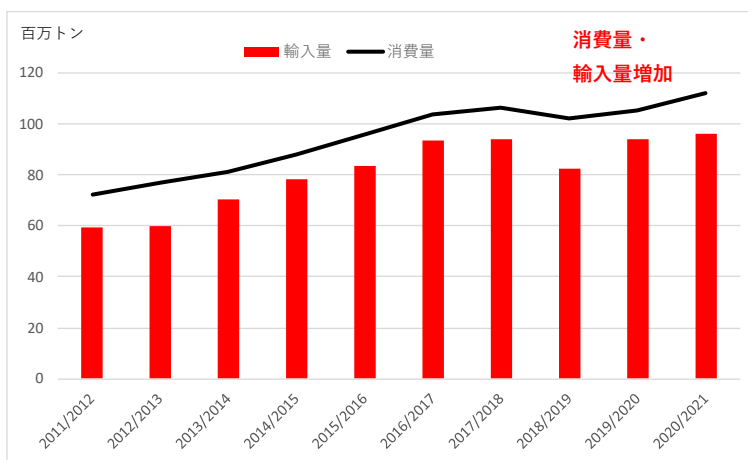
ベトナム、カンボジアは5月時点で米の輸出規制を解除した。また、一時、米の輸出を停止していたミャンマーは、5月は中国向け等15万トンの輸出枠の設定、6月もフィリピンやマレーシア等向けに輸出を行う模様である。米の主要輸出国で輸出を禁止している国はなくなったとみられるが、タイの降雨不足による乾季米の減産や雨季米への影響懸念もあり、3月末から高騰していたタイの米の国際価格は、依然として高止まりしている。

(図1) 中国の大豆消費量・輸入量の推移

2 世界最大の輸入国・中国の動向

最初に新型コロナウイルスの感染が発生した中国では、感染者の減少とともに、需要が回復しつつあり、前年度までASFの影響で減少していた豚肉生産も回復しつつある。

米国農務省は6月の需給報告で、2019/20年度の中国の大豆の輸入量は9,400万トンと2年前の水準まで回復し、2020/21年度は史上最高の9,600万トンまで増加すると見通した。



出典：米国農務省 「P&D」 (2020.6)

中国の海関統計によれば、2020年1－4月の輸入量は2,450万トンと前年同期より0.5%増加している。中国はレアル安の影響から主にブラジル産大豆を手当てしている。特に4月はブラジルからの輸入量が全体の9割近くを占めている。今後は、ブラジル産の在庫の減少やレアル高に伴い、米中通商協議の一次合意の履行もあることから、米国産を中心とした輸入に切り替わるとみられる。

一方、とうもろこしについては、2020/21年度の消費量は2.76億万トンと史上最高となり、生産量の2.60億トンを上回り、不足分は期末在庫から充当されるとみられている。また、国内需要が旺盛なため、国内価格が上昇していることから、内外価格差が拡大し、1－4月の輸入量は214万トンと前年同期比で1.3倍となっている。

3 世界の穀物需給と我が国の輸入

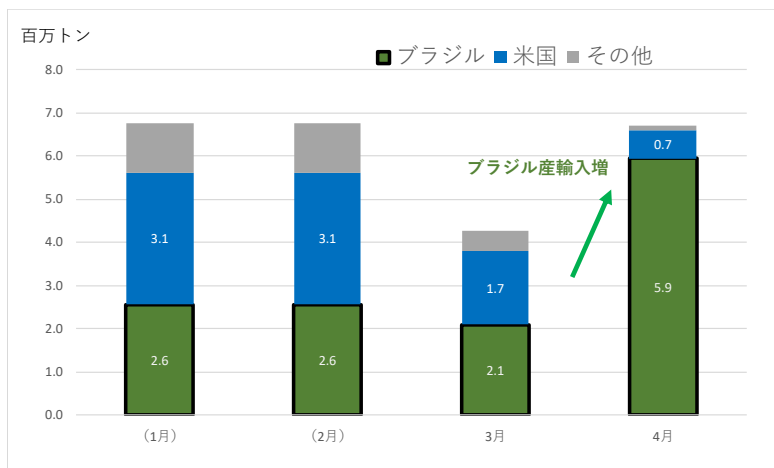
米国農務省の6月見通しによれば、世界の穀物生産は、2020/21年度の小麦、とうもろこし、米とも史上最高を更新する見通しとなっている。冬小麦を除き、北半球は6月下旬現在、生育段階であり、今後、とうもろこしが作柄を決定する重要な時期である受粉期を迎える米国等、産地の天候に留意が必要である。

最近、新型コロナウイルスの感染の影響が収まってきた中国の輸入の増加も見られるが、世界の穀物等の期末在庫が高水準なことや、2020/21年度の穀物等の供給が潤沢であると見込まれていることから、今のところ国際穀物価格等に目立った影響は出ていない。

なお、我が国の小麦やとうもろこし、大豆については、米国、カナダ、ブラジルといった主産国からの輸入がほとんどを占めている。

米国やカナダからの穀物輸入は順調に行われている。最近、ブラジルでの感染拡大が目立っているが、ブラジル政府は食料品の生産・流通について必要不可欠な業種（エッセンシャル・サービス）と位置づけており、新型コロナウイルスの感染拡大による影響はほとんど受けておらず、今のところ順調に輸入が行われている。

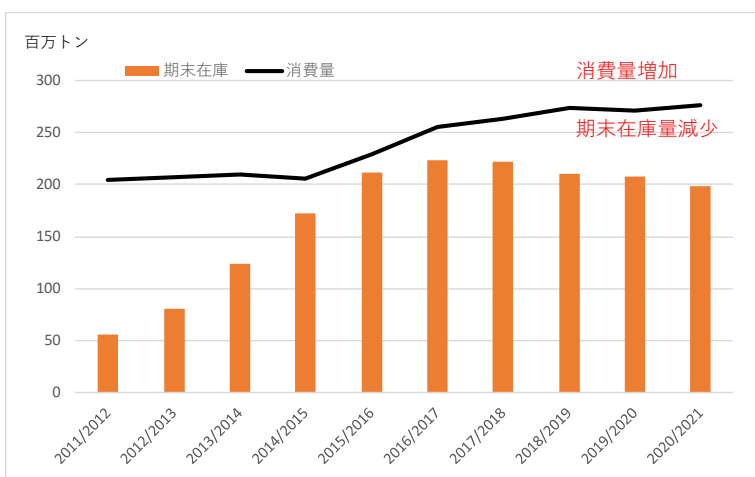
（図2） 2020年1－4月の中国の大豆の国別輸入量の推移



出典：中国海関統計（2020.5）

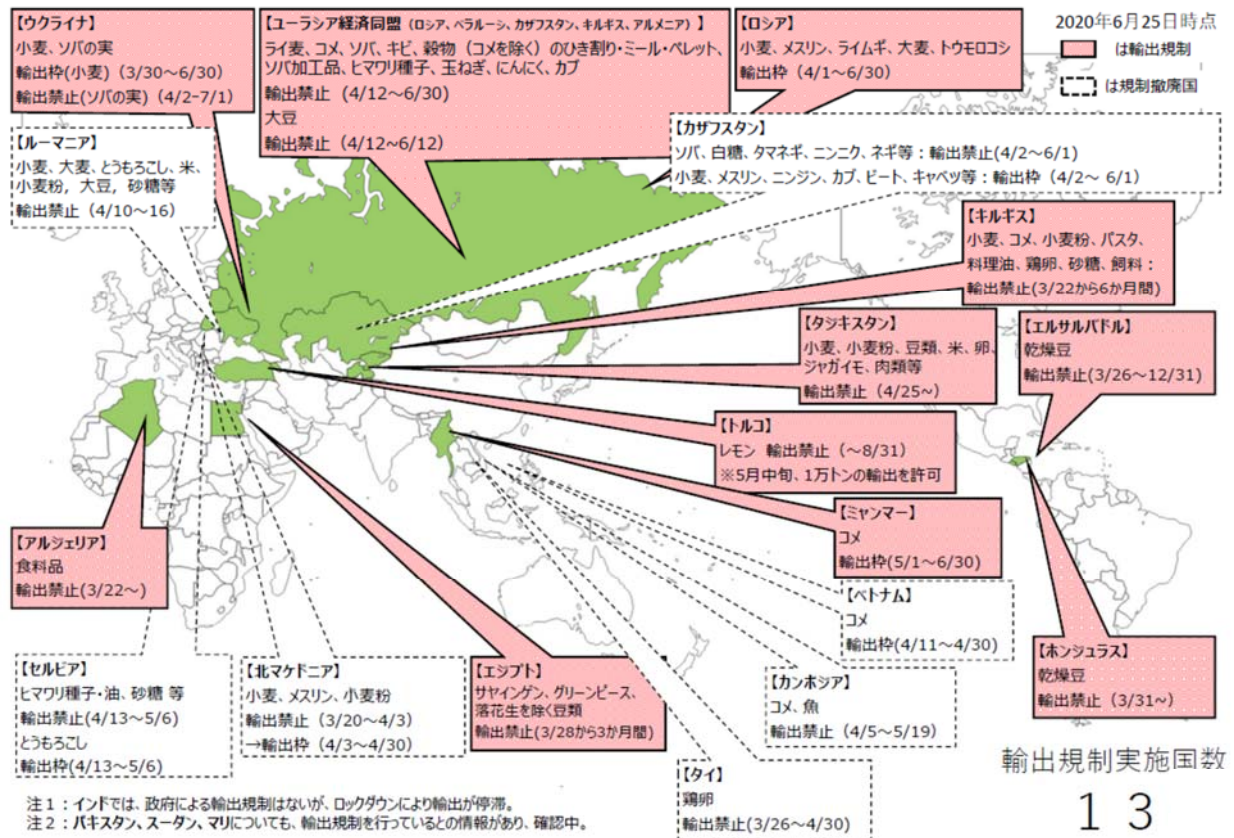
注：1－2月は合計で公表され、内訳が不明なため、均等に表示

（図3） 中国のとうもろこしの消費量・期末在庫量の推

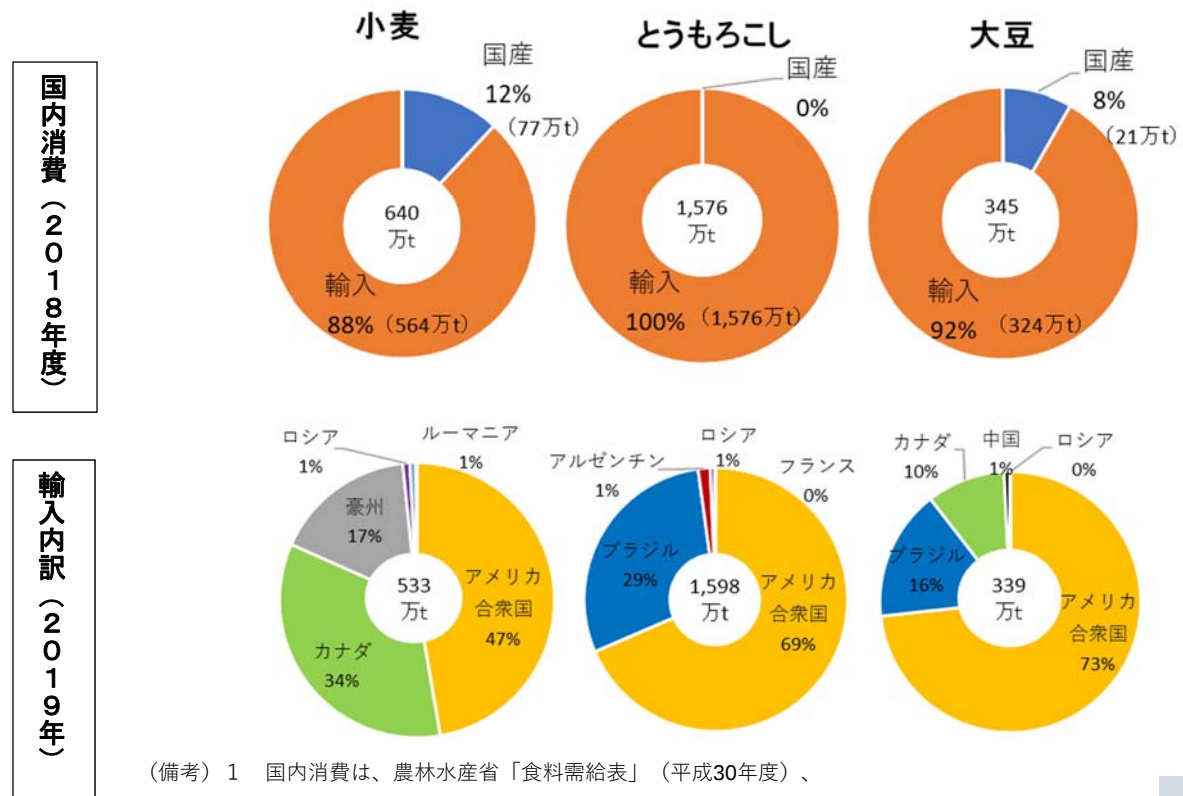


出典：米国農務省 「P&D」（2020.6）

(図4) 農産物・食品の輸出入規制に関する最近の主な動き (6月25日時点)



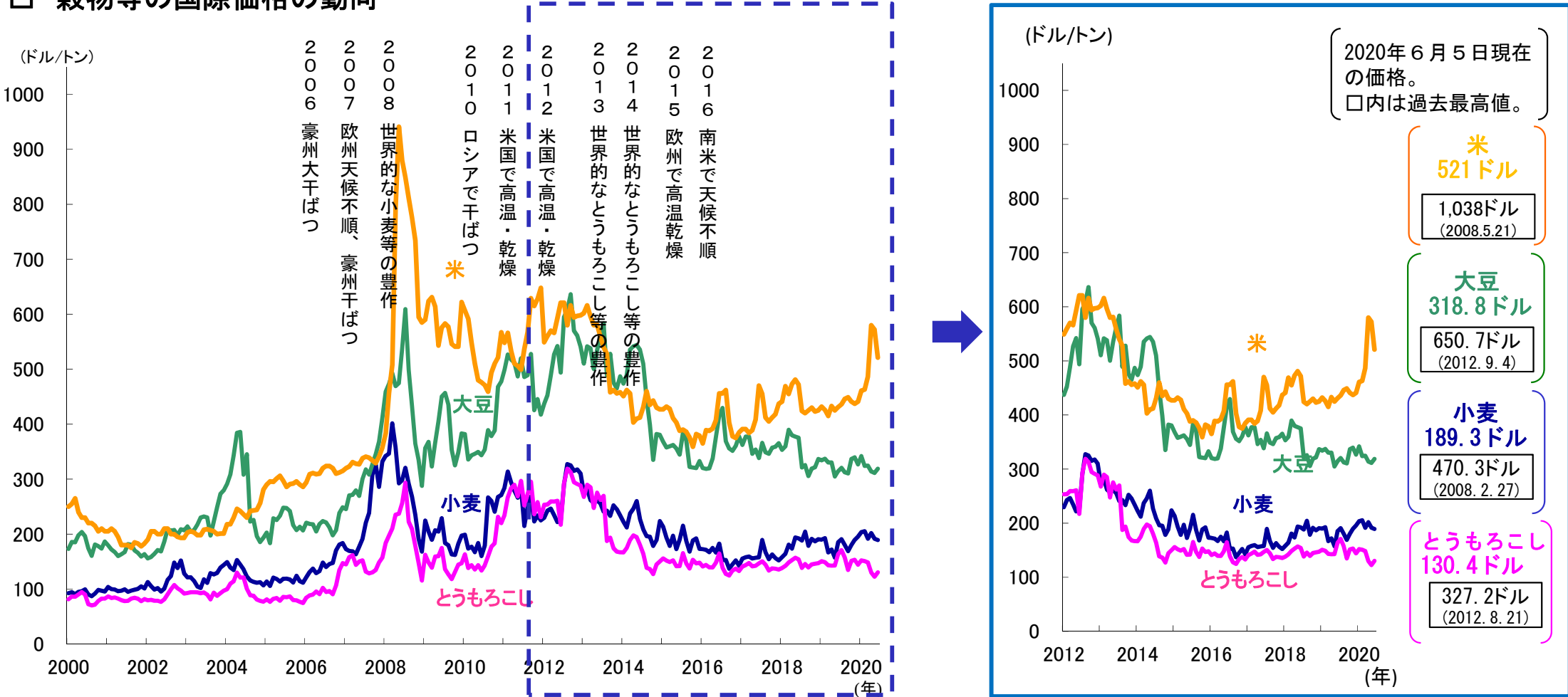
(図5) 我が国の品目別輸入数量 (小麦、とうもろこし、大豆)



資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

○とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な小麦やとうもろこし、大豆の豊作等から穀物等価格は低下。
 2017年以降ほぼ横ばいで推移。米は、2013年以降タイの在庫放出等から低下したが、2020年ベトナムの輸出枠の設定等により3月末から上昇した。4月末のベトナムの輸出枠の解除等で下落したものの、依然として高止まり。
 ○なお、穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要により2008年以前を上回る水準で推移している。

□ 穀物等の国際価格の動向

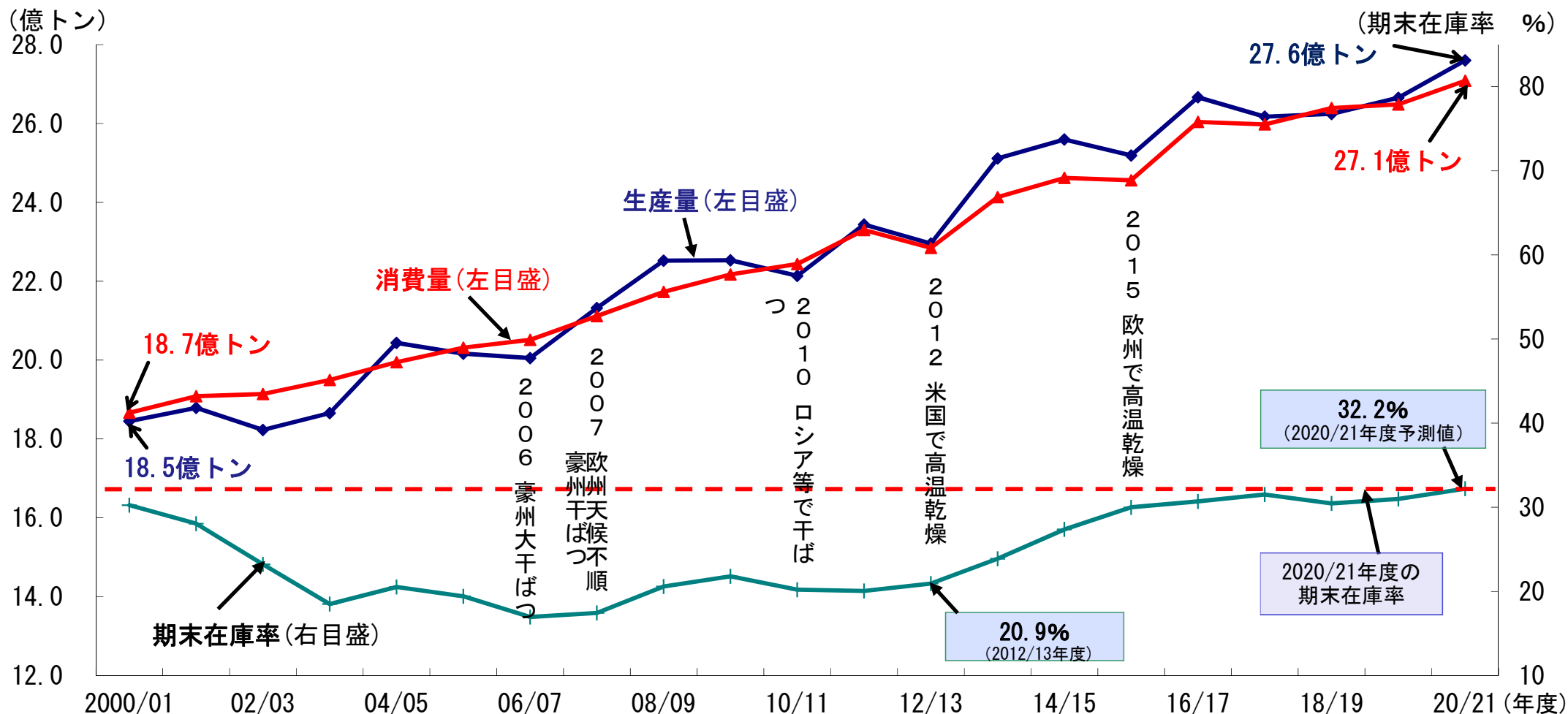


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。米は、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
 注2：過去最高価格については、米はタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、米以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2020/21年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2020/21年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回ることから32.2%となり、直近の価格高騰年の2012/13年度(20.9%)を上回る見込み。

□ 穀物(米、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(June 2020)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料3 令和元年12月以降の食品小売価格の動向

○ 加工食品の国内の食品小売価格については大きな値動きはなし。

令和元年12月～令和2年5月の 食品小売価格の動向

消費者物価指数(総務省)													
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R元	R2					
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	12月	1月	2月	3月	4月	5月	上昇率 (前年 同月比)
生鮮食品を 除く総合	97.7	100.0	99.7	100.2	101.0	101.7	102.2	102.0	101.9	101.9	101.6	101.6	-0.2%
食パン	98.5	100.0	101.1	100.9	101.4	102.3	102.0	102.2	101.8	101.2	101.6	101.2	-1.1%
即席めん	94.2	100.0	100.0	99.5	99.0	102.4	103.8	103.6	104.9	104.4	105.0	103.7	5.0%
豆腐	98.0	100.0	100.0	100.5	100.7	101.0	101.0	101.0	101.5	101.4	101.5	101.7	0.8%
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	97.8	94.5	93.3	92.8	92.3	91.8	91.9	92.1	92.6	92.9	-0.1%
みそ	100.6	100.0	99.4	99.1	99.6	101.4	102.0	101.9	101.7	102.4	102.5	102.8	0.9%
チーズ	97.9	100.0	99.3	98.8	102.6	102.9	102.7	101.3	102.3	101.2	102.5	99.9	-1.0%
バター	95.0	100.0	101.5	101.7	102.0	102.3	102.4	102.5	102.3	102.2	102.1	102.2	0.1%
マヨネーズ	103.5	100.0	98.1	96.7	95.3	95.1	94.2	95.7	93.9	93.9	95.2	95.3	-0.2%

資料:総務省消費者物価指数
注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。

【参考】令和2年1月～令和2年6月の 食品小売価格の動向

食品価格動向調査(農林水産省)															
	H26	H27	H28	H29	H30	H31 (R元)	R2								
品目	平均	平均	平均	平均	平均	平均	1月	2月	3月	4月	5月	6月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
食パン	97.7	100.0	100.9	99.5	99.8	103.2	103.2	102.3	101.6	102.3	103.2	101.9	-1.3%	-1.1%	
即席めん	93.3	100.0	99.8	99.6	99.5	105.3	108.5	108.5	107.9	108.5	107.9	107.9	0.0%	1.3%	
豆腐	100.3	100.0	96.9	95.6	95.0	95.7	95.5	95.1	95.1	95.5	97.1	95.5	-1.6%	-0.8%	
食用油 (キャノーラ油)	102.8	100.0	96.3	94.6	94.6	100.1	98.3	97.1	96.8	97.4	97.1	97.1	0.0%	-2.8%	
みそ	99.0	100.0	99.8	101.6	106.8	111.0	110.8	111.7	110.6	110.8	112.9	110.6	-2.0%	-0.2%	
チーズ	97.1	100.0	100.0	99.7	103.2	105.7	105.3	106.9	105.3	105.3	100.6	102.7	2.1%	3.1%	
バター	94.6	100.0	101.3	102.0	102.3	102.7	103.0	103.0	103.0	103.4	103.7	103.4	-0.3%	0.4%	
マヨネーズ	101.6	100.0	99.2	98.4	97.2	102.4	101.4	101.0	100.0	100.4	100.0	99.3	-0.7%	-3.7%	

資料:農林水産省 食品価格動向調査(加工食品)
注1:平成27年の平均値を100とした指数で表記している。
注2:調査は原則、各都道府県10店舗で週1回実施。ただし、平成30年10月以降は月1回実施。
注3:調査結果は調査期間中の平均値で算出。
注4:令和2年4月の調査は、東京都、大阪府、埼玉県、千葉県、神奈川県、兵庫県、福岡県での調査を中止し、5月の調査は東京都、大阪府、北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、神奈川県、石川県、岐阜県、愛知県、京都府、兵庫県、福岡県での調査を中止し、6月の調査は全国で再開したことから、それぞれ前月の値とは接続しない。